

地理学から見た「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」

— スイス, 他を中心に —

大 嶽 幸 彦*

(平成14年10月22日受付; 平成14年12月9日受理)

要 旨

本稿は、明治21年発行の「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」を地理学の立場から分析し、考察を加えたものである。今回はスイス、他之部第6巻を取り上げた。本論では地理学的考察が可能な箇所を中心に引用し、それらについて若干の考察を試みた。

KEY WORDS

Reports of Investigation on Europe and the United States	欧米巡回取調書
Eye of Observation	観察眼
Agriculture	農業

1 はじめに

筆者は既に「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」を基に、フランス国、ドイツ国、ベルギー国に関する記述の中から地理領域に関する部分を取り出し、分析と考察を行ったことがある。^{1,2,3)} 本稿ではスイス、他の取調書を地理学から分析対象とすることとした。取調べの内容はフランス国、ドイツ国、ベルギー国の事例とかなり違っており、担当する樋田書記官の得意な分野、特に農業が中心になっている。

欧米巡回取調書第6巻は、フランス、ドイツ、ベルギーの巻と比べて、スイス、ハンガリー、オランダ、ルクセンブルク、イタリア、合衆国の国々を駆足で巡回した記録であり、それぞれにかけた日数は緒言に述べる通り、ごくわずかである (p.1)。

第6巻の取調書の主な項目は上記の国々に関する補足的な事項である。ベルギー国と同様、水産、山林、特許、地質等の事項については言及されていない。

2 「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」スイス、他之部

欧米巡回取調書は明治維新の我が国の殖産興業に必要な法律や諸規則を収集してることが最大の目的である。従って、取調書の内容が地理領域を多々含んでいるかどうかは取調べにあたった担当官の興味、関心による。今回のスイス、他の場合には、フランス、ドイツ、ベルギー程地理的な内容が豊富ではなかった。これは本文の検討からも明らかになるが、取調べの時間的制約とヨーロッパにある程度慣れ、地理的興味が薄れたことも要因のひとつと考えられる。

* 社会系教育講座

本稿は地理学からの分析を目指しているのではあるが、取調書の報告順に従って検討することにした。なお、第6巻は本の翻訳を長々と掲載している箇所があるが、本稿の趣旨とはそれるので大幅にカットした。引用のページが飛ぶのはそのためである。

ベルギー国ブリュッセルから発せられた欧米巡回特報第7号(明治19年7月30日)は**スイスの運輸の便**について報告している。スイスはアルプス山脈をひかえる山国であるため、天然の地勢よりすれば運輸と旅行には艱難のはずであるが、実際は便利が良い理由を鉄道と道路に力を尽くしたスイス人の奮励に求めている(本文, p.1)。

天然の風景に富むことが、ヨーロッパの人々をスイスに惹きつけている理由であり、ジュネーブ湖、チューリヒ湖等、大小数十カ所の湖水があると述べている。しかし、それらの湖も我が国の琵琶湖にはかなわないし、箱根湖(芦ノ湖のことか。筆者注)、諏訪湖と比べても一長一短があると比較している(本文 p.2, 以下、本文からの引用ページになるので本文を省略)。

道路修築、橋梁の架設方法を聴取している事例では、初めに慎重に万全の計画を立てた後、建築に熟練した請負者に命じて工事に入らせていることを聴取している(p.3)。このようにして100年の間に全国の道路、橋梁の工事を終了したという。現在は修繕を主としている。

スイスは何も観光業のみで栄えているのではなく、農業や林業も盛んである。例えば、スイスの牛、羊は有名であるし、他の国々に多く販売している(p.3)。工業としては、時計、双眼鏡の製作がよく知られている。

スイス全体としては農学校が5カ所にあり、**学校運営の経費**の捻出が注目される。すなわち、学校の所轄地の収穫物及び、牛馬羊の繁殖の利益をもって経費にあて、不足するわずかの経費をカントン(我が国の郡の如きもの)より補助金を得ている点である(p.4)。目下、話題の独立行政法人の経費捻出を思い起こさせる。最後に、「スイス国人民ハ勤勉ナリ儉素ナリ忍耐ナリ温和ナリ」の徳と実益を尊ぶ習俗を買っている。

同じくベルギー国ブリュッセルから発せられた欧州巡回特報第8号(明治19年8月11日)はスイスの**生糸の新販路**を報告している。スイスは山国であるため工業製品もなるべくかさばらない物を目途としているかのように、従来は時計、双眼鏡の工業が多かった。それが、絹織物のヨーロッパのみならず、主として合衆国に輸出しているという(p.7)。品質はリオン製に及ばないとしても、中等品は幾分リオンの販路を奪っていることを聞き取りしている。動力として豊富な水力で製品を織りだしているのは、生産費を縮小させるためである。原料の生糸の一部は日本から輸入しているが、多くはロンドン経由である(pp.7~8)点を直取引に代えるよう、建議している。

上記と同じくブリュッセル発の欧州巡回特報第9号(明治19年8月3日)はハンガリー国の**農工業の概況**を報じている。ハンガリーは従来原野に富む国で、開墾及び山林の植樹に熱心であり、保護奨励に努めてきた(p.9)。その結果、山林は緑にあふれ、開墾地は耕地または牧草地となっていて、原野と呼ばれるような土地はほとんどないと聞き取りしている。ただ道路の修築や橋梁の架設については我が国の現況よりも一歩進んでいる位で、フランス、スイスの道路と比べると悪く、橋梁は粗いと述べている(p.10)。

ブダペストがドナウ川を挟み、東南のブタと西北のペストを総称してブタペストというのは、日本の博多と福岡におけるような関係だと述べている(p.10)。ただブタの市外とペストのそれを結ぶ2つの大橋、1つは釣橋、1つは一個の石柱と川中に建てた鉄橋は欧州巡回中どこにも見なかった程、大きく壮観である(p.10)と激賞している。

ハンガリーは牧畜も盛んで名馬を多数産出し、他の国に販売してきたが、それも改良に改良を重ねてきたためである。そのため種畜場も5700haと広大である(p.10)。飼育は舎飼で、日々運動のために放牧し、号令一下、数100頭の馬を一斉に運動させているのは軍令の隊伍におけるようだと言っている(p.11)。ハンガリーは養豚業も盛んであり、主としてドイツに販売している。各農家が飼育している豚を1箇所を集めて肥育し、販売するための中央養豚所がある(p.12)。ここでは13万から15万頭の豚を収容する豚舎がある。豚の飼料はとうもろこしや大麦の粉である。病気にかかった豚は屠殺して石鹼とするため、場内に石鹼製造所があるというのは興味深い。輸出の便をはかるため、鉄道の引込み線が通っている。

ハンガリーでは中央に官設の大工場を建設し、大砲、鉄道、農業機械など個人の力では成せない製品を製作している(pp.12~13)。

ぶどう酒についても中央貯蔵所があり、各地の醸造品の品質鑑定を行い、等級を定め、商標をつけて貯蔵している(p.13)。本人の希望を待っていつでも販売の媒介を行なっている。設立形態は半官半民である。

ハンガリーは木材に富んでおり、木工業も盛んであるが、個人の営業である。制作の大きいものは木挽き、小さいものは室内の器具製作に至るまで需要に応じて製作している(p.13)。

ブリュッセル発欧州巡回特報第10号(明治19年8月5日)はオーストリアの農学校及び貴族の所有地について報告している。オーストリアの農学校は全国に5カ所あるが、特に見るに足るものなしとしている(p.15)。ただし、ブリールト農学校のビール製造学科には注目している。遠くアメリカ合衆国からの留学生もいる。

貴族の1人、プレンス・フォン・テンボルト家は国土の30分の1の土地を所有しているといわれる(p.16)。政府の紹介を得て、谷大臣及び随行員とも、その所有地を訪れ、聞き取りをしている。それによれば、所有地17万5千町歩のうち、森林が12万5千町歩、耕地・宅地、溜池その他の雑地が5万町歩という。森林の経営は30年単位で行っているという。木材はドイツ、フランスなどに輸出する。耕作は機械化を進めており、牛40頭分の動力のある機械を使っている。溜池は鯉魚を主とし、小さな池は2カ年養魚して1カ年耕作する(p.17)。大きな池は6カ年養魚して1カ年ないし2カ年耕作する。鯉魚はウィーン、ベルリン、パリ、ロンドンまで販売する。牧畜も盛んであり、牛、馬、羊、豚が主で肥料を得ることが目的である。堆肥の作り方は日本のやりかたを採用している(p.18)。

所有するシャトーは7カ所あり、いずれも所有地内に散在し、広大な王宮のようであるという。87歳になる老公のシャトーは30年間かけて造られ、そこで谷大臣以下の一行を饗応したのである(p.19)。

パリ発の欧州巡回特報第34号(明治20年4月1日)は輸出品に関する景況管見として、当時の日本の関心の的である生糸の事を論じている。当時は日本、中国、ポルトガルの国々で生糸の産額が増加しつつあった。ただ、毛織物が流行しており、絹織物を用いる者は少なくなっていた(p.43)。また、絹を用いることがほとんど稀になっていた(p.44)。絹織物は高尚ではあったが、価格が高く、毛織物に比較して不利であった。毛織物のほか、交織物も出回っており、各国の生糸は売れ残りが多かった(pp.44~45)。そこで著者は我が国の生糸の輸出が需要を超えないように注意を促している。また、生糸の品質を良くするよう提案している。しかし、我が国においても、上等の女物衣装で人目に触れない箇所はことごとく麻または木綿を用い、表の部分だけ絹を用いることが紹介されている(p.45)。最後に、我が国はみだりに生糸の輸出額を

増加させようと努めるよりも、生糸の品質を高めた方が実利があると提言している (p.46)。

パリ発欧州巡回特報第35号 (明治20年4月8日) はルクセンブルク国の幼馬放育所について報告している。著者の言う幼馬放育所は (若駒育成牧場のことか、筆者注) 毎年、5月15日に開場し、10月15日に閉場している。ここの飼育は次の通りである。

- 1) 成長に最も必要な時期に、幼馬を集めること
- 2) 飼養方法を適度に行なうこと
- 3) 定時に一斉に号令をかけ、運動させること

以上の働きかけにより、幼馬の骨格を良くし、他の馬に接する時に穏やかにし、鉄道、その他の物音にも驚かさないようにするのが目的であると (p.47)。

その他、日付・発信地は不明であるが、追加特報には、イタリアの生糸検査所が取り上げられている。ミラノには3カ所の生糸検査所があり、1カ所に合併しようとしたけれども各々の社員に好き嫌いがあり、無理であったという (p.65)。生糸検査所組合員の出資で成り立っている。

検査の事項は次の通りである。

- 1) 水分をはかるため乾燥させること
- 2) 弾力、延力をはかること
- 3) 切り口の度をはかること
- 4) 綜の度をはかること
- 5) 糸口の数を調べること、など

以上の試験結果は小片の羅紙に登記して監査請求者に渡している (p.66)。

追加特報第33号はイタリアの製糸所について報告している。イタリアで製糸業の多い地方はミラノ、トリノ近接の地である。特に、ミラノ商法会議所、副所長ドベキ氏は製糸業を営んでおり、そこで我が国の参考になる要点を聴取している。(以下、旧字を新漢字に改めた。)

- 1 上ケ枠ニ外箱ヲ備ヘ箱ノ中ニ鉄管ニテ温度ヲ送ル事
- 2 糸曳キ釜ニ個毎ノ向フニ煮釜ヲ以ッテ回轉セシムル事

以下、省略

本文の中では、女工を12時間 (食事時間を除く) 働かせているが、働きの良い者には雇主の方でこっそり貯金しておき、退職の際に渡すなどアメとムチの労務管理を行っていることが読み取れる。日本では女工哀史の歴史が明治時代の紡績業に起こったことや、今なお過労死が起こるなど労務管理に問題がある業種が絶えない。

この取調書第6巻にはイタリアの実業農学校規則が掲載されている (p.191)。実業農学校の教育上、最大の目的とするところは理論と実業との学科を以って学生の便宜をはかり、各種の耕作法や一般の農事工業又は特別の事業を教授することであった。

基本として、ぶどう栽培、ぶどう酒醸造、家畜飼育、酪農製品、果樹、オリーブ栽培、オリーブ油製造、野菜栽培などの技術を教授する。

教員の給料は法令により、下記のように定められている。

- 1級 教授、年棒3,600リラ
- 2級 教授、年棒3,000リラ
- 3級 教授、年棒2,400リラ

- 1級 教授補, 年棒2,000リラ
- 2級 教授補, 年棒1,800リラ
- 3級 教授補, 年棒1,600リラ

教授の年棒差は600リラ, 教授補の年棒差は200リラと違いがあるが, 等級の少なさと同一年棒であることに驚かされる。

実業農学校の学科はイタリア語, 歴史, 地理書, 算術, 幾何学, 測量術, 画学, 簿記学, 物理学, 博物学, 農学, 工作学等の初歩である。

オランダの海芽府? 発の欧州巡回特報第19号(明治19年10月30日)は輸出品に関する管見総論として, 取調書の随所で披瀝してきた意見をまとめて述べている(p.571)。

まず, 彼我の事情を詳しく知り, 用意周到であるべきとし, 次の点に注意を喚起している。

- 1) 商品及び荷造りに至るまで需用者の望みに合わせなければならない。
- 2) 需要を超えて輸出してはならない。
- 3) 需要先の信用を得なければならない。
- 4) 需要先の需要に無関心ではならない。
- 5) 原価を安くし, 運送の便宜を計るべきである。
- 6) 販売地の支配人又は代理人に良い人物を選ぶべきである。
- 7) 取引先の間屋及び仲買人を選ぶべきである。

将来, 頼りになる輸出品は生糸, 米, 煙草である(p.573)。

フランス国ボルドーから発せられた欧州巡回特報第32号(明治20年3月18日)は製造業を發芽セシムルノ方便について報告している。

国民の厚生利用の向上を図るには製造業に頼るしかないとし, 農業の進歩は農業機械により, 肥料の製造はそれを造る機械により, 商業の隆盛を思えば, 築港, 造船, 鉄道, 運輸, 貨物, 積み下ろしなどに至るまでことごとく機械に依るとしている(p.575)——「特に製鉄業を万般製造の母とす」(p.576)とあるように, 日本では製鉄が工業の基幹産業であった。——次に, 国民に製造心を起こさせることの急務を説き, 考察している(pp.576~577)。そのためには, 事物の見聞に基づかなくてはならないとし, その効用を説明している。——日本人が欧米各国に留学したり歴訪を重ねる人々が年々多くなり, 機械を見てくる機会もふえたと述べている。しかし, 他の公務をおびており, 自ら製造業に従事すべき人々の耳目に触れる機会が少ないのをどうしようかと思案している(pp.577~578)。

3 おわりに

本稿はフランス国, ドイツ国, ベルギー国の事例に続き, 明治20年前後に欧米を巡回した農商務省の谷大臣以下6名が各国で調査し, 収集した資料を取りまとめた記録, 「農商務省蔵版 欧米巡回取調書」をなるべく地理学の立場から分析し, 考察を加えたものである。今回は第6巻, スイス, 他を扱った部分を取り上げた。本論での分析以上に, ここで論ずるべき点は本巻では特になかった。しいて言えば, 農業に関する規則や学校や耕作方法に関する部分が多かったといえる。この巻で回った国々はかなり大急ぎであり, 資料, 条例を手に入れると別の国の宿で

翻訳し、次々に本国へ送っていた様子が分かるのである。従って、地理的面の観察や考察が少なく、フランス、ドイツ、ベルギーの事例ほど地理学からの分析が行えなかったことが結果として残った。地理学はやはり現地でじっくりと観察したり、考察を必要とする学問である。

注

- 1) 大嶽 幸彦 (1997) : 「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——フランス国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第17巻, 第1号, 319~330
- 2) 大嶽 幸彦 (1999) : 「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——ドイツ国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第18巻, 第2号, 645~654
- 3) 大嶽 幸彦 (2000) : 「地理学から見た『農商務省蔵版 欧米巡回取調書』——ベルギー国を中心に——」上越教育大学研究紀要, 第19巻, 第2号, 397~405

The Analysis of “Ohbei Junkai Torishirabesho”
—— “Reports of Investigation on Europe and the United States” ——
from the Angle of Geography
—— focusing on some Examples in Swiss and other Countries ——

Yukihiko OHDAKE*

ABSTRACT

The object of this research consists in the analysis of “Ohbei Junkai Torishirabesho”-reports of investigation on Europe and the United States-published in the 21th year of the Meiji Era (1888).

The author has analysed the contents of VI volume . He has quoted some examples of geographical matters, and tried to give some consideration.

* Division of Social Studies, Department of Humanities and Social Sciences